

丹波山、霧氷
に寄せ合う肌
も凍てつき・
・・。

南海部 覚悟

京都府北西部、福知山と舞鶴の中間、国道から長い取り付け道路を登り切った山上に、その広大な施設がありました。

管理棟応接室の巨大な嵌め殺し硝子の眼下に、丹波山系の峰々が、蒼々と折り重なって広がります。

華やかな紅葉も既に色を落とし、寒々としたモノクロームの世界が、間もなく全山を覆い尽くす季節です。

「それで、京都府警の刑事さんが、私共にどの様なお用件でしょうか？」

冬の低い陽光に、暗いシルエットになった肉付きのいい長身を、窮屈そうに折り曲げながら、施設の代表と称す男が、目の前のソファに腰を下ろします。

【代表理事 佐藤圭一】と書かれた、ガラステーブル上の名刺に一瞬視線を落とし、黒木玲子が自分のバックから、透明なビニル袋に入った黄色い物体を取り出します。

「これに見覚えは？」

「――モデルガンですか？」

回転弾倉（リボルバー）式拳銃の形態ですが、色が派手なオレンジイエローで、外装の素材もひと目で樹脂製と見て取れ、確かに玩具然とした代物です。

「一見、おもちゃに見えますが、耐熱・耐衝撃樹脂で成形されていて、加工精度もそれなりに高いものがあります。ドイツの9mmパラベラム弾が使用可能で、つまり殺傷能力を持つ武器です。3日前に銃器不法所持で執行猶予中の蒐集狂の男から押収しました。」

「――それが？」

「男はプログラム通販サイトから、3Dプリントデータをダウンロードしたと云っています。」

「私共の通販サイトからということですか？」

「仰る通りです……。」

「確かに、モデルガンのプリントデータを何種類か頒布してはいますが、あくまでディスプレイ用のモデルです。推奨の樹脂マテリアル以外は想定していませんし、耐衝撃樹脂や金属を扱えるプリンターにも対応しておりません。私共としましては、実弾を発射できるモデルを供給するつもりは一切ありません。」

「購入したプリントデータに、多少手を加えて耐熱・耐衝撃樹脂プリンターに対応させたようです。」

「私共が、責任を問われることになるのでしょうか？」

「現在のところ、プログラム通販の業者さんに責任を問える法律はありません、今日は

京都府警としての要望をお願いしに来たのです。」

「当該、モデルガンのプログラムデータの販売を中止して頂きたいのです・・・。」
厳しい顔で、白河笑子が続けます。

「今のところ、このプログラムデータでプリントアウトされたモデルガンが、犯罪に使用された事案は把握しておりません。ただ、もしそのような事案が発生した場合・・・。」

「分かりました、直ちにモデルガンプログラムの頒布は中止いたします。ダウンロード先が分かる範囲で、出力済の製品を回収させても頂きます。元より、世間の皆様にご迷惑をかける意図は全くないのです。私共としましては、巨大な工場や複雑な製造技術を備えたメーカーでなくとも、遜色のない工業製品を自宅で製造できる事実を、世間に啓蒙していきたいだけなのです。」

「啓蒙？と仰いますと・・・。」

「口で説明するより、見ていただいた方が早いと思います。もし宜しければ、施設内をご案内いたします。」



管理棟を出て、旧店舗棟へ進みます。

随所に店舗用の恒久デコレーションが残され、屋内の要所々に配置された植え込みや水面も、きめ細やかに手入れされた華やかで広大な建築物です。

遙か頭上のトップライトから、穏やかな冬の陽光が注ぎ込んできます。

所々に（クラドニ作動中）と書かれた黄色いパネルが下がっています。

それについて訊こうとするのを遮るように、「施設の土地は、私が先祖代々相続してきた山林原野です。戦前に行われたボーリング調査によって、豊富な温泉が湧出することが分かっていました。昭和最後の年に、父が30年間の定期借地権契約を東京の大手流通グループと締結しました。売り場面積約5万平米、この手の商業施設（ショッピングモール）とすれば、中規模のものです。商圈は福知山市・綾部市・舞鶴市・・・温泉施設を併設したことが幸いして、一部京都市の買い物客も取り込めたようです。」

フロアが微妙にうねって広がります。

笑子が怪訝な顔で代表理事を見やると、「この店舗の、他にない特徴は非常階段等を除いて、建物に段差がないことです。3階建てなんですが、フロアが緩やかにうねって全ての階が連続しています。設計した建築士の拘りなんだそうです。」

「定期借地権の期限がきた今から5年前に、全ての建物・設備を私が買い取りました。他の手持ちの不動産を全て売り払い、多少の借金もしました・・・今ここには、50家族、約160人ほどが生活しています。何れも私の親族・友人家族です。そしてそれ以外の仲間もここにはいます。ご紹介しましょう！」

云い終らないうちに、フロアの奥から無数の犬、猫、小鳥、人間が出てきました・・・その数とても百や二百では効きません、遠目に見るとどうもそれらしい形態ではありますが、何かおかしい・・・動きがぎこちない、電動モーターの駆動音のような音もします。

どうやら外装が樹脂や金属でできた、機械のようです――。



「これが先ほど話しました、私共の世間に対する啓蒙の主たるツールです。」

「――ロボットですか？」

「現在ここには、160人の人間に対して、12,800(人)のロボットが稼働しています。人ひとりにロボット80(人)です、私共はロボットに親しみと敬意を籠めて、何台や何基ではなく(何人)と数えるようにしています。」

「プログラム通販による私共の売上の過半は、これらロボットの3Dプリントデータです。大量生産品の手元メーカー製愛玩ロボットの、1/10の価格で頒布しています。窓の外の駐車場をご覧ください・・・。」

理事長に促されて眼下の広大な駐車場を見渡すと、一面に無数の小型作業車が動き回っています、よく見ると表面のアスファルトをカットして剥がしているようです。

「あの作業車も全てロボットです、舗装を剥がした後、同じロボットが土壌改良を行い、作物を植え付けていきます。」

「ロボットに農作業をさせているんですか！」

「ここに居るロボット全てに、役割があります。与えられたプログラムに従って、稼働しているのです。店舗棟に5箇所ある旧バックヤードスペースを作業工房として、人とロボットが協力し、構成パーツの3Dプリントアウト、組み立てを行っています。ロボットがロボットを創っているのです。ほんの数年前まで、個人では一本のスプーン、一本のフォークさえ製造することが出来ませんでした。今や3Dメタルプリンターを使えば、子供たちでさえ幾らでも製造できるのです。」

明るい吹き抜けや瀟洒にデザインされた植え込みを巡りながら、うねるフロアを上昇すると、細かく区切られたパーティションブースの奥に、大きな円筒形のカプセルが横

たわって並んでいます。

笑子が不思議そうな眼でブースを覗き込むと、「ここの住人の、寢床です。耐震シェルターの機能を備えていて、重量物の落下にも耐えられます。ベッド下部にサバイバルキット一式が装備されている筈です。」

隣のブースには一人用のワンタッチ・テント、その隣には大型のキャンプ・テントの中に、寢袋が三つ並んでいました。

「寢床の趣味は人様々ですね、家具売り場のベッドで寝起きしている住人もいます。頑丈な建物の中で24時間全館空調、トイレや洗面もフロアごとに幾つもあります、温泉施設も稼働していますから何時でも入浴できる、ランドリーや厨房もプロ仕様のものが備わっていますから、通常の生活に不自由することはありません。」

「カットサロンやクリニックも稼働しているようですね！」電飾サインを指差しながら驚いた様子で、笑子が振り返ります。

「住人の中に医師や美容師・理容師がいますね、助かってます。」

「食料の供給はどうされているんですか？」

「最初は、近在の農家から野菜や穀物、米を購入していました。駐車場の農地整備が広がってきまして、相応の収穫を上げられる様になっています。昨年からバックヤード工房の一部を水耕栽培場に改装しまして、そこからも野菜が収穫できるようになりました。」

「肉や魚は？」

「敷地内のため池や川から、淡水魚は漁獲できます。肉は当初家畜の放牧を考えたのですが、なかなか難しくて・・・乳製品も含めて、まだ市場から購入しているのが現状で、今後の検討課題です。」

「施設を稼働させているインフラは？周りに電柱や電線が見当たりませんか？」

「ショッピングモールの時代から、電力会社やガス会社との契約は一切しておりません。ここの温泉はとにかく高温でしてね、全て水蒸気で噴出してきます。まず高圧水蒸気で発電タービンを回し、様々な熱交換器をへて、空調の熱源となり、液体の湯となったところで、温泉施設に供給しています、生活用水や飲料水も同様の方法で取得されます。また、広大な屋根の殆どにソーラーパネルが設置されていますので、その電力も使用します。」

「じゃ、ここに住んでる限り全くお金が要らない？」

「労務は全てボランティアで、物品の売買もありませんしね・・・ただし、外部から仕入れないといけない物資もあります。固定資産税等の税金も払わないとね・・・本当は、全てを断ち切って、この施設だけで自前でやっていきたいんですが、なかなか難し

くて・・・。」

ロボットの猫とじゃれ合っていた玲子が立ち上がって、「じゃ、理事長さんの子供の頃の愛読書は？」

「ジュール・ベルヌと、アイザック・アシモフです・・・。」

「【海底2万マイル】と【はだかの太陽】ですわね！」

「施設内の物品は、生理的に共有し辛いもの以外、全て住人の共有なんだからって・・・個人で必要なものは自分でデザインして創るか、アーカイブプログラムから選んで、ロボットに創って貰うんだそうよ。施設の住人は、誰も権利を主張しないから、物やサービスの価値を表示する貨幣を流通させる必要がないのよね・・・。」

「価値の貯蔵と更新は、3Dプリントアウトした物品を、リサイクルしながら再生産を繰り返すことで維持する訳ですか・・・何だか危ういなあ。」

京都府警の刑事部屋（捜査一課）で、SRI（科捜研）の奥寺がいつもの様に油を売っています。

「住人ひとりに、80台のロボットだから、その分のサービス価値が希薄になって、貨幣による表記が出来ないだけじゃないんですか、温泉の熱に頼ってるエネルギーの価値も同様ですよ。」

「ロボットは(台)じゃなくって、(人)って数えるの！」

苛々しながら笑子が語気を強めます。

「施設内でやり取りされる価値の単位が微小過ぎて、貨幣が必要ないってこと？奥寺君。」パソコンキーボードの手を休めながら、玲子が尋ねます。

「――その通り。米10粒くらいの遣り取りに、お金が必要ですか？製材所で薪材貰ってきても、金よこせとは言わないでしょ、中東の産油国で、ポリ缶一杯原油を酌んでも、タダですよ。物品やサービスの流通単位は、貨幣の最小単位に連動します、微細な価値はそれ自体意味が無いんです。生活するのにお金が全く掛からないと云うと、まるでユートピアのようだけど、原価が極端に微細だから、実現できてるだけじゃないんですか？」

「違うわよ！ボランティアの労務で、価値はちゃんと産み出してるの、外部から物を仕入れてるし、税金も払ってる、廻りの社会とはきっちり結びついてるのよ。その上でお金のいらぬシステムを構築してるの！」

見てきた事実に感化されやすい笑子が、意固地になって訴えます。

「――何だ朝から大声で！刑事部屋の半分の騒音担ってるな、白河。」

刑事部長の永山が、刑事部屋に入ってきました。

「それより黒木、昨日の報告書だが・・・何か他に無いのか？」

「――と云いますと？」

「上から喧しく云ってきてるんだ、何か理由をつけてガサ入れしたいらしい。」

「上と云いますと？」

「――東京の本庁だ、警察庁の役人から、本部長に連絡があったらしい。府警がやら

んなら、警備局が直接指揮を執るって云ってるそうだ。」

玲子が難しい顔をして、「その更に上が云ってるのかも、知れませんわね・・・。」

「更に上と云うと？」

笑子が丸い目をして首を傾げます。

「国家公安委員会・・・。」

「おい！馬鹿、よせ！また左遷は堪らんぞ！あの施設にまた、退職自衛官とネグロイドが潜伏してるとでも云うのか？」

「既に憲法も改正されたことですから、その線は無いと思います。考えられるのは・・・。」

その時、玲子の机の内線が点滅して、「部長、本部長が呼びです。SRIの担当者がいるなら、一緒に同席してくれって・・・。」



一時間ほどで、永山と奥寺が刑事部屋に帰ってきました。二人とも疲れ切った蒼白い顔をしています。

「一大事だ黒木！明日、府警警備部と一緒にガサ入れする、先方には事前に通知しない、抜き打ちだ！」

「———家宅捜査の根拠は？」

「通常の搜索・差押え許可じゃないんですよ、黒木さん———。国際原子力機関（IAEA）の特別査察ってことになっています。」

奥寺が永山を補足します。

「内閣危機管理センターの指揮のもと、国家公安委員会が主導して、IAEAの査察官が立ち会います。京都府警は、それらの人間的なサポートといった立場のようです。」

「憲法改正に伴って、国際機関からの要請があれば、内閣は裁判所の許可を得ずに個人・団体の搜索・差し押さえが出来る国内法が成立した。同法施行後、最初の実施案件だ———。」

「でも、IAEAだって何も煙の立たないところに、いきなり査察ってことにならないでしょう？」

「IAEAは、逆に国家公安委員会からの要請を受けたみたいです。」

「なんですって！国際原子力機関の特別査察ってのは口実なの？」

府警本部に漂う空気が俄かに慌ただしくなります。

警備部のフロアから、荒々しい怒号が聞えてきました。

管轄の全警察署に、緊急動員をかけているようです。



「特別査察に、全く根拠が無いってということでもないようです。気になる施設だから、以前から折々に調べていたんですが・・・。」

奥寺が自分のタブレットを起動しながら、話し始めます。

「これが、当該施設の昨夜の赤外線衛星映像です。」

iPadの画面に、ボンヤリとカラフルな縞模様が表示されます。

「この映像から、単位時間のエネルギー放出量が計算できます。温泉掘削時の古い資料から湧出熱量を計算し、ソーラーパネル総面積から日中の発電量を積算すると、この施設の現在のエネルギー収支が、概算で分かります。」

「で、どうなんだ？」

「温泉とソーラーパネルから取得できる最大エネルギー量の、約2倍のエネルギーを常時放出しています。温泉とソーラーパネル以外に、有力なエネルギー源が存在する筈です。」

「温泉の湧出量が掘削時の2倍になったかも知れないじゃない？」

笑子がドヤ顔を突き出します。

「湧出量と泉質は毎年京都府に報告されている、70年以上殆ど変化のない湧出量が、ここ5年ほどで倍になるのは考えにくい・・・。」

「考えられる、エネルギー源は？」

「黒木さんと笑さんは、大分の密造原爆、あの大事件の当事者だったんですよね・・・
・プルトニウム**239**の生成プラントは？」

「――黒鉛炉よ。ウラン238からプルトニウム239を生成してたわ。」

思い返ししながら、笑子が答えます。

「農地を整備するために、駐車場のアスファルトをカットして剥がしていたんですよね・・・。」

「黒鉛炉の減速材に使うって云うの？でも、肝心の酸化ウラン（イエローケーキ）は？」

大分の事件の密輸ルートは、被疑者が逮捕されて消滅した筈よ。」

奥寺の顔を見つめながら、玲子が囁きます。

「施設のある丹波山地一帯は、今は既に閉山していますが、かつては良質なマンガンを採掘する鉱山がありました。施設の温泉掘削も、マンガン鉱床の地質調査の為のボーリングだったと思います。古い記録の中に、マンガンの他、ウラン鉱床も存在したというのがありましてね、有名な岡山の人形峠より良質で有望だったと記述されています。戦後、採掘の為の調査に入ったらしいんですが、直ぐに中止されました。京都の北西で放射能汚染の危険が拭いきれなかったようです、直前に起こった第五福竜丸事件も影響しているようです。」

「施設で、ウランを採掘しているというのか？」

永山が低い声で呟きます。

「——可能性はあります。3年前にあの施設で排水浄化設備の事故がありました。フィルターの一部分が目詰まりを起こし、**BOD**の高い排水がオーバーフローして、下流の水域を汚染したんです。保健所の立ち入り調査で、かなりの数の排水サンプルを採取したんですが、その中から、極微量の放射性物質が検出されていたのが、ずっと後になって分かったんです。その頃には既に下流住民との補償交渉も終わり、自然放射線量より僅かに高い程度でしたから、事を荒立てたくない各方面の意向もあって、うやむやで終わったようです。」

「警備局の危機管理室辺りから、国家公安委員会に具申したんだろうか・・・？」

「——外事情報部かも知れませんが、大分のときは同部が表に出てきましたから。」

「黒木さんのいう通りかもしれません、大分の事件以来、外事情報部は海外の違法武器取引に異常に神経を尖らせていますから・・・。」

その時です！刑事部屋のドアを開け放って、秘書室の若いスタッフが飛び込んできました。

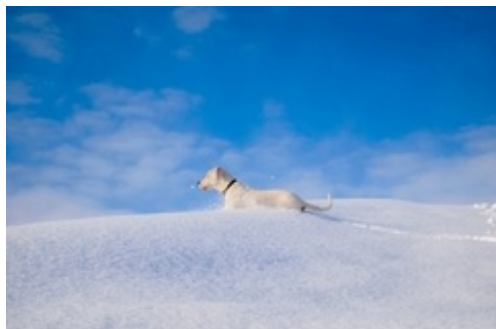
「刑事部長！問題の施設から、本部長宛てにメールが届きました、本部長室に集まってください！」

京都府警察 本部長殿

拝啓

明日、IAEA特別査察の名のもとに、理不尽な家宅捜査を強要されようとしている施設の代表です。

代表理事といたしまして、当該施設に対する一切の査察・捜査の拒否を、宣言いたします。



私共はこの施設に入居以来5年間、只管にある理想を追い求めてきました。

それは、他人を頼らないこと、企業に頼らないこと、社会に頼らないこと、国をあてにしないこと。

少なくとも、自分の生命を維持するに必須なものは、自ら生産できること。

要するに、貨幣経済を介して目的を実現しようとしなないこと。

ものを取得するために就労し、あるいは借り入れて、購入資金を準備するのではなく、自ら直接そのもの自体を生産し、目的を実現する方法を目指してきたのです。

その為に、身の周りの有形・無形のもの価値（貨幣経済上の）を、より微細に減縮する努力を重ねてまいりました。

個人の所有権を放棄し、リサイクル再生産を徹底させ、数多の知的財産をアーカイブしてきました。

そして5年前、尽きることのないエネルギーを生じせしめるこの場所を、幸いにも取得することが出来たのです。

私共は必要なものを、必要な量、必要な品質で創ります。

それにより、過剰生産になり得ない、過剰品質になり得ない、使命を終えた生産物は悉く分別リサイクルを行い、素材（マテリアル）の総量を常に維持することが可能になります。

不覚にも3年前に排水事故を起こし、下流の住民に多大な被害を与えた浄化排水も、現在ではリサイクル水源として再利用され、一切の排水放流が不要となりました。

今日まで、流通市場から購入していました肉や魚（動物性蛋白質）も、植物のそれを素材としたバイオプリンターの応用で、遜色のない生産の目途がついています。

懸案であった高度医療の分野も、ロボット技術の発展で、自前のオペ等施術が可能となりました。

もはや、私共を既存の社会に繋ぎ止める、一切の根拠が無くなりました。

今ここに、私共の踏ん切りがつかしました。

本日24時を持ちまして、私共は彼岸の人的往来を当面の間、遮断いたします。

施設を囲うように、結界を張ります。

元より、私共もこの国に属し、この社会の一員であります。

ネットを介した情報の遣り取り、プログラム通販の決済、税金の支払い等は継続して行います。選挙権も行使いたします。

人的往来を遮断しても、私共が日本人であることに変わりはないのです。

その上で、この度の憲法改正に伴って施行された、理不尽な国内法の順守を一部拒否いたします。

特別査察の嫌疑が何であるのか、私共には知る由もありません。

仮に、私共施設の、エネルギー収支に関する嫌疑であったとしても、基本的に私共が関与する処ではなく、また説明する義務もありません。

少なくともこの施設では、価値が価値を産む貨幣経済の様に、資源が資源を産み、エネルギーがエネルギーを産むような、都合のいい収支環境ではないことを、ご理解頂きたいのです。

敬具

代表理事 佐藤圭一

「―――何なんだこりゃ！」

部屋の主が大声を挙げます。

「こら、査察を拒否しはる意思表示でっしゃろなあ。」

京訛りの警務部長が、本部長の大声に反応します。

「―――当たり前だろ、そう書いてるじゃないか！」

「ウランの採掘を、認めたちゅうことどすか？」

今度は総務部長が、反応します。

「―――そんなこと、何処に書いている！ちゃんと読んだのか！―――俺が言いたいのは、誰が情報を、先方に流したのかってことだ！」

本部長席を取り囲む、京都公安委員会の5人の委員たちがざわつき始めます。

「そうどす！なんで施設ん理事長が、あしたんガサ入れを知っとるんや？どなたか流したんおすか！」

きょろきょろとした目が、刑事部長の永山の方に集まります。

「ちょっと待ってください！私はい先ほど皆さんの口から・・・。」

「そうだ、俺たちも刑事部長や警備部長に話す直前に、本庁からの電話で初めて知ったんだ・・・つい小一時間前だぞ！」

「―――本部長はん、そんならあしたんガサ入れに立ち会う、本庁んスタッフが信用でけへんちゅう事では、おまへんか？」

「よし！この件は本庁に対して秘匿する、全員緘口令だ！」

ノンキャリアの現本部長の、何時もの口癖です。

やれやれと云った表情で、永山が話を現実に戻します。

「兎も角、抜き打ちのガサ入れは実現できなくなりました、具体的な捜査手法を警備部とも打合せて、一部変更いたします。」

壁際で訊いていた玲子が、うんざりとした表情で本部長室から出てきます、廊下に控えていた笑子と奥寺を見つけると、両肘を脇に当て、掌を天井に向けて、あきれ返ったように首を傾げました。

早朝の丹波山系を初冬の朝もやが被いつくし、取り付け道路を進む只ならぬ一団の物々しさを、一層際立たせます。

濃いブルーグレーの装備を纏った、京都府警機動隊の一団約300名が、先頭を切って徒歩で進みます。

玲子と笑子を含む刑事約50名がそれに続き、鑑識と奥寺たちSRIのスタッフが、一台の警察車両に捜査機材を満載してノロノロ後を追います。

しんがりは、IAEAの査察官2名と警察庁の担当官3名を乗せた、大型ワゴンが2台、まるで高貴な公家を乗せた牛車のように、勿体をつけて静々進入してきます。

施設の取り付け道路は、木々の谷間を通る一本道、抜き打ち査察の秘匿性を担保する為、運用車両の数は最小限、隊員たちは息を潜めて山道を急ぎます。

「こういう情景を見ると、ついつい山梨の上九一色村を思い出す。」

永山が、先に連なる機動隊の列を見ながら、小声でしみじみ呟きます。

「あの強制捜査に参加されたんですか？」

並んで歩く玲子が驚いて振り返ります。

「警視庁機動隊員だった・・・。」

「――上九一色村って？」

笑子が尋ねます。

「オウム真理教事件・・・地下鉄サリン事件直後の強制捜査よ。」

「あの時は、毒ガス感知の為に、先頭の隊員がカナリアを入れた鳥籠を持っていた。警視庁にそれだけの危機感があった訳だ。昨日のメールに在った（結界）とは一体何の事だろう、隊員が危険な目に合うのは避けたいんだが・・・。」



ショッピングモール時代の名残の巨大なデコレーションゲートを潜ると、まだ農地化されていない広大な駐車場の先に、朝もやに見え隠れしながら、派手な極彩色の建物群が見えてきました。

山上の立木から、一斉に椋鳥の群れが飛び立つと、聞き覚えのある重低音と、腹壁を揺らす激しい振動が一行を襲ってきました。

建物の前面高さ20m程の空間が、きらきらと明滅し、薄い膜の様に光りながら揺らぎ

始めました。

前後に大きくうねって、次第に機動隊の先頭に近付いてきます。

気が付くと光の膜は、既に建物の全周を取り囲んでいるようです。

「―――奥寺！奥寺君！」

玲子の絶叫に、奥寺が全速で駆け寄ります。

「―――黒木さん！」

「あの光る揺らぎに違いないわね！」

「―――常紋トンネル！」

笑子が額に掌を翳しながら、低い声で呟きました。

「下がれ！全員下がれ！」

機動隊長の野太い声が、周囲を圧倒します。

光る揺らぎから、隊の先頭を50m程下げたところで、左右に展開して待機させます。

「誰か行って、何か投げ込んでみろ！」

警備部長の指示が出されます。

3人が、ジュラルミン製の盾を押し出して、揺らぎに近付きます。

一人が近くに在った1m程の枯れ枝を、大きく振りかぶって投げ込みます。

一瞬、電気溶接のようなスパークが瞬いて、乾いた破裂音と共に、一面に火の粉が落ちてきました。

何人かが続けて投げ込みましたが、結果は同様でした。

「何を投げてても同じです、揺らぎの内側にレーザー発振装置がある限り、手の出し様がありません、今の装備で突破するのは困難です！」

奥寺の忠告に警備部長が大声を挙げます。

「機動隊車両に隊員を乗せて、突っ込ませたらどうなんだ！突破できるだろう？」

「レーザーの膜は恐らく何重にも張られていると思います、全て突破する前に、穴だらけになります！」

その時、牛車の指揮官のひとりが車から降りてきました。

「突破できないなら、拡声器で査察に応じるよう繰り返し命じなさい。それと刑事部長、上空に向けて何発か拳銃を発射してみなさい、当方が本気だということを、相手に解らせるのです！」

「拳銃の使用は、本部長の許可を取得しませんと・・・。」

「緊急の対応です！見ての通り、相手は今日の査察を想定して準備しています。抜き打ちの査察という趣意が既に瓦解してるのです。何故そうなったかは後ほど詮索しますが

、今は現状に対応しなさい！」

永山が渋々一課長に命じて、拳銃を上空に撃たせたその刹那、くぐもった銃の発射音と共に、廻りの大気が一瞬霞んだように白くなり、発射した筈の銃弾がぽとりと地面に落ちてきました。

「どうした一課長！ジャムか？」

「あっ！いや、ちゃんと発射しています。イジェクトされた薬莢が部長の足元に・・・。」

一課長が首を傾げながら、2発目、3発目を続けざまに撃ちます、銃弾は何れも力なく地面に落下してきました。

SRIの奥寺が真っ青な顔をして、永山の方を振り返ります。

「部長！ひょっとして我々は、とんでもない連中の相手をしてるのかも知れません！」

警備の機動隊員約100名を現場に残して、本隊は今日の査察を諦め、府警本部に引き上げてきました。

刑事部屋も、何時になくざわついています。

「強行突破には自衛隊の装甲車両が必要だろうな・・・。」

「上空からヘリで降下したらどうなんだ？」

「駄目らしい、結界は建物をドーム状に包んでいるみたいだ。SRIがドローンを飛ばして確認してた。」

「長期戦になるな、こりゃ・・・。」



刑事部屋の入口の近くで、玲子の名を呼ぶ若いスーツ姿の男がいます。

玲子が手を挙げて立ち上がると、「貴女が黒木刑事ですか、報告書を読ませて頂きました。内閣官房副長官の三浦といいます。」

刑事部長の永山が、慌てて応接室へ案内します。

「失礼ですが、副長官が今回の査察の指揮を・・・。」

恐る恐る永山が尋ねます。

「現場での直接の指揮は、今日同行させて頂いた警備局の板垣秘書官が行いますが、全体の判断は私が執らせて頂きます。今日は、黒木刑事の報告書に、内閣として御礼が云いたかったのです。」

「――と云いますと？」

「今回の件、警備局から公安委員会を通して、施設のエネルギー収支に関する憂慮すべき報告が、継続して挙げられていたのですが、どうも具体的な施設の内容が掴めなくて、内閣としても苦慮していました。施設で生活する人間がどういった人々なのか、組織としてのシステムや共通の思想・信条を持っているのか、どんな生活を送っているのか、代表理事の佐藤という人物はどの様な人間なのか・・・。一昨日、内閣に挙がってきました貴女の報告書の内容で、首相を始め各閣僚に、施設に対する鮮明なイメージが形成されました。」

「そのままにしては於けない・・・と云うことでしょうか？」

低い声で玲子が尋ねます。

「――仰る通りです。」

「それにしても、想定はしていましたが一筋縄ではいかない人たちですね。先程危機管理センターからメールがありまして、センターのネットワークに外部から侵入された形跡が見つかったようです。抜き打ち査察が見透かされていたのも道理です。厄介な人たちだ・・・。」

「――どう厄介なんですか？」再び玲子が尋ねます。

「代表理事の佐藤氏の話には、大いなる合理性が存在します。確かに現在の立体積層成形技術で、製造できない工業製品は見当たりません。大量生産やその為の製造技術、巨大な製造設備といったしがらみから解き放たれ、バイオプリンターや分子配列プリンターのような最先端の技術で、製造できる分野は益々広がるでしょう。原材料の供給に関しても、3Dプリンターの工程を逆転することで、製品から素材（マテリアル）をほぼ100%回収できる技術が確立されつつあります

ネット上の製品デザインに関わる知的所有権も、半年も経過すれば殆ど無償で使用されているのが現状です。プリンターを稼働させるエネルギーにしても、再生可能エネルギーからその先には、パーソナルな核エネルギーが実現できるのかも知れません。

物の価値は年を追うごとに微細に減縮され、貨幣が不要となる日も近いとも思えます。

」

「佐藤理事の云う理想とは、全ての国民一人々が小さな工場であり、農場であり、牧場であり、生簀である。それぞれが必要なだけ、必要な品質で物を創り、決して人を頼らない、企業を頼らない、社会を頼らない、国を頼らない。生きていくに必要な最低限の物資は、自分で全て準備する、ということだと思えます。確かにそれなら社会に決定的な貧富の差は生じない、過剰生産がないから環境にも優しい・・・ただ、それでは困る人々がこの国には無数にいます。」

「人口の1/4に迫ろうとしている高齢者、身障者、身寄りのない入院患者、それと身の諸事を他人に任せている一部の富裕族。彼らは、過去に取得した価値や国から付与された価値を、貯蔵・運用して生活しています。彼らには貨幣しかないんです、金しかないんですよ。」

「機能の面で、純粹に価値を貯蔵できるのは、貨幣以外に在りません。生産と回収を繰り返して貯蔵しようとしても、そこには多少とも知的・肉体的労務を伴います。それらを提供できない階層も存在するのです。更にいえばそれらの人々が、過去に価値を生産したからこそ、今の平和で豊かな日本が在るともいえるのです。」

「そういった意味で、あの人たちはこの国にとって厄介なのです、やはり査察を受けて頂かないと・・・。」

「ひとつ確認させて頂きたいのですが、もしあの施設のエネルギー収支で、IAEAや国家公安委員会が憂慮している核関連のものではなく、他のエネルギーで説明が付けば、特別査察は必要ないということでしょうか？」

「IAEAと政府の協議によりますが、基本的には仰る通りかと思います。ただし少なくとも、合理的にすっきりと説明される必要があります。――黒木さんは、あの施設を存続させたいんでしょうか？大分の大事件を担当された刑事さんとも思えませんが・・・。」

蚕の社近くの、カップルの部屋です。

窓越しに見通す休日の空が乳白に霞み、冷たい北風が強まってきました。

据え置き電話に着信があって、笑子が出ます。

「奥寺君です。近くまで来たから寄りたいて、何か今度の件で話があるみたい・・・。」

「じゃ、ちょっと片づけて・・・男子なんだから、絶対に変なものは見せないでね！」

「わかってますう～。朝からグッシャグッシャの寝室には、カギを掛けて入れないようにして於きますう～。」



「施設の監視はどうしてるの？」

「IAEAが設置したモニタリングポストに併設して、定点カメラを10台稼働させています。担当スタッフが交替でモニター監視していますが、私のタブレットにも常時映像が配信されてきます。」

玲子が入れた紅茶を啜りながら、リビングのテーブルで3人が顔を突き合わせます。

「どうしたのよ？何だか酷く元気が無いわね・・・。」

「どうにもこうにも、エネルギー収支を精密に再計算したら、どうしてあれだけ大量に熱を放出できるのか、解らなくなってきたんです。」

「だから、地下からウラン鉱石を採掘して、酸化ウラン（イエローケーキ）に精製し、黒鉛炉を使ってプルトニウムを生産しているってのが、IAEAや公安委員会の見解でしょ、黒鉛炉から出た熱が、廻りに放出されているんじゃないの？」

「もし、本当にそれだけのプラントが稼働しているなら、黒鉛炉の熱だけじゃ収支がマイナスになるんです、既存の地熱発電やソーラーパネルの電力を総動員してやっと何とか、というレベルです。余剰のエネルギーを放出させる余裕はとて・・・。」

「―――だってこれ、奥寺君が云いだした話でしょ！最初の計算が間違ってたの？」
笑子が菓子皿のチョコレートを摘まみながら、問い詰めます。

「計算は、様々なファクターを組み合わせるから、間違いはないよ。問題は、黒鉛炉でプルトニウムを生産しても、こんな大量のエネルギーは放出できないってことだ。それに、生産したプルトニウムを国際的な武器取引組織に流したとこ

ろで、得られるのは金だけなんだ、あの代表理事の理想とは真反対の行為じゃないかって気もする。」

「そうね、何処か基本的なところを考え直してみる必要が、あるのかも知れないわね・・・。」

紅茶のお替りを、ポットに注ぎに行く玲子を追いかけるように、「代表理事に会った時のこと、もう一度思い返して下さい。何か報告し忘れたような事ありませんか？」

「そうね、笑ちゃん何かある？」

「黄色い札が所々にぶら下がってたけれど・・・。」

「そうそう（クラドニ作動中）って書かれてた、何のことか訊こうと思ったけど忘れてたわ。」

「クラドニ作動中？クラドニ！」

トップライトの淡い陽光をボンヤリと見上げていた奥寺が、いきなり鳥の巣の頭を掻き毟り、タブレットを取り出すと一心に入力を始めました。

「何でもこうも俺はバカなんだ！」

「どうしたの、奥寺君！」

驚いて駆け寄るカップルを尻目に、タブレットの操作に没頭します。

暫らくすると、「合う、合う！ドンピシャ合う！」涙を流しながら液晶画面を額に押し付けます。

笑子が鳥の巣を掴んで顔を上げさせると、「済みません、興奮しちゃって・・・あんまりピッタリ合うもんだから。」

「泣いてないで、ちゃんと説明しなさい！」

「はい！———ちょっとその前に実験させてください。」

キッチンカウンターの上のAIスピーカーに、玲子が持ってきたステンレスの配膳トレーを被せると、「小麦粉か、片栗粉ありませんか？」

小麦粉をトレーの上に一面に敷き詰めると、タブレットと接続してスピーカーからブザーのような音を出します。

トレー上を小麦粉が移動して、複雑な図形が現れました。

「これを、クラドニ図形とか、クラドニ効果とか呼んでいます。固有振動の節に沿って、粉体が整列する現象です。」

「様々な超音波を組み合わせて、これと同様な現象を、立体的に大気中で再現することが出来ます。酸素や窒素の分子が、複雑な立体図形に整列するんです。そして、その領域では衝撃波が生成されにくい・・・つまり、超音速で移動する物体に対して、大気

が弾性体となり障壁となります。」

「外見的には、空気の粘性が上がったように見えます。銃の乱射事件が社会問題になってるアメリカで研究され、開発された技術です。」

「いつか、箱根の兵器学者が云ってた話ね！」

「それで、一課長が撃った弾が、3発とも飛ばなかったの！」

笑子が、目を見開いて甲高い声を挙げます。

「大気のクラドニ効果には、もうひとつ特徴的な性質がありまして、今回はそっちの方が重要なんですけど・・・クラドニ状態の大気は、その微細構造に伴う回折格子によって、領域から放出される光のスペクトルが、赤方偏移を受けることが確認されています。だから、赤外線衛星映像には補正をかける必要があつて・・・。」

「何のことか解らない！」

業を煮やした笑子が、金切り声を挙げます。

「だから、この前見せた衛星映像に補正をかけると・・・。」

「———想定されるエネルギー放出量とピッタリ合う訳ね！」

「そうです！あの施設は特段異常なエネルギーを放出している訳じゃない！普通なんです！———ああっ、何で気付かなかつたんだ！」

その時、玲子の携帯に永山から着信が入ります、「黒木！TVを点けてみろ、施設が大変だ！」

夕暮れの丹波山系は、乳白の世界に沈んでいました。

黒く煤ける建物の残骸の随所から、まだちよろちよろと紅い炎が立ち上がり、それを埋めるように細かな雪が降り続いています。

「機動隊はどうしてたのよ！」

「出火して暫らくは、まだ光る揺らぎが張られていたみたいです。強い北風に延焼が早く、建物内部に可燃性の物も多かったので、人を救助するのが精一杯だったようです。」

「出火の原因は？定点カメラ10台で視てたんでしょ！」

苛立つ玲子が奥寺を怒鳴ります。

「丁度雪が強くなった時間で、どの画面も真っ白なんですよ。上空を飛んでたTV局へりのカメラが、最初に炎を捉えました。警備していた機動隊も匂いで異常に気が付いたみたいです。」

「そんなに奥寺君を責めないでください、それでなくても道中ずっと塞ぎ込んでたんですから・・・貴方のせいじゃ無いからね、大丈夫よ。」

何時になく笑子が奥寺を気遣います。

「だって、悔しいじゃない！施設に罪は一切無いのよ！」

何時になく玲子が語気を強めます。

白い雪山が、小高く膨らんだ頂上に、この寒気にも拘らずスーツ姿の若い男が立っています。

「三浦副長官！いらしてたんですか。」

「ああっ、黒木刑事！雪の中ご苦労様です。」

乳白の世界が次第に明るさを失い、間もなく冬の夜の帳が、辺りを包み込もうとしていました。

「明るい時の火事でよかった、深夜なら恐らく死者が出ていたでしょう。」

「これで、心置きなく査察できますわね・・・。」

「それには及ばないでしょう、この状態でIAEAのモニタリングポストに何らの異常も感知されていません。地下に大きな構造物も無いようですし、警備局や公安委員会の憂慮は、きっと杞憂だったと考えます。何れにせよ、明日の消防と警察の現場検証に、IAEAと板垣秘書官を立ち合わせて、判断します。」

施設居住者160名は、何れも軽傷で救助されました。

建物は全焼し、12,800(人)のロボットを始め、全ての設備、内容物は焼失してしまいま

した。

一夜明け、居住者の事情聴取に、玲子と笑子、永山と奥寺が入院先の病院を訪ねています。

そこには、以外にも明るい表情の、代表理事がいました。

「ああっ、あの時の刑事さん・・・ご心配お掛けしました。」

「佐藤代表理事、この度はお気の毒なことで・・・。」

「——お気遣い有り難うございます。12,800(人)のロボットを死なせてしまいました。可哀そうで残念です。」

「火事にはいつ気付かれたんですか？」

「管理棟で寛いでいたら、作業工房の方から悲鳴が上がったんです。駆けつけてみると天井から火花が落ちてきて、北風に煽られて手が付けられませんでした。工房は後で追加した作業設備の為に、天井内にかなりの素人配線を施設していたものから・・・。」

「電気設備からの失火とお考えですか？」

「レーザーシールドの結界を施して、誰も人を寄せ付けず、火事になったんですから、内部失火以外に考えられません。機動隊の皆さんには、ご迷惑をかけました。」

「刑事さんが【海底2万マイル】と【はだかの太陽】と仰ったので、なるほど外部からこの施設は、そのように見られてるのかと憂慮していた矢先に、IAEAの特別査察が抜き打ちで入るという情報を得しましてね、素直に受けるのも悔しいからと、ついつい意地を張ったのがこの有様です・・・。」

窓から見える福知山の山並は一面白銀に輝き、雪に吸われて無音の街路が何処までも拡がります。

「私共の理想郷は、5年で滅失してしまいました。ただ、私はあの施設を、我国のサテライトユートピアと考えていましたから、全く失望はしていません。やがて、日本中があの施設の理想を実現することになります。その為私共は、5年間慎重に準備を続けてきました。」

「と、云いますと？」話を訊いていた永山が尋ねます。

「私共が、あの施設で世間に対し、啓蒙していたのは？」

「ロボットの、プログラム通販でしたわね・・・。」

玲子が呟きます。

「私たちの意を反映した子供たちが、既に数百万台、この国で稼働しているのです。」張り詰めた空気の永い間があって、それを破るように奥寺がおずおずと口を開きます。

「代表理事に、ひとつお聞きしたいのですが・・・。」

「何でしょう？」

「あの施設に、クラドニシステムを作動させていたのは、何故ですか？」

薄っすらと口元に笑みを浮かべた代表理事が、「施設では、個人が創るものに一切の規制を掛けていません。だから、創った道具に対する、人の安全を担保する必要があったのです。私共が唱える理想には、そのような配慮がどうしても必要なのです。」



府警本部に帰る車内です。

「奥寺君！あの状態で外部から施設に火を掛けるとしたら、つまり放火するとしたら、貴方ならどうする？」

「何だ黒木、放火を疑ってるのか？」

「だって変ですよ、私たちが駆けつけるずっと以前から、現場に居たようなんですよ、まるで火事を予期してたみたいじゃないですか！」

「三浦副長官のことか・・・偶々、あの時間に視察を希望されたんだ、滅多なことは云わん方がいい！」

「———どうなのよ！奥寺君！」

「エレクトロン発火装置を積んだドローンを使います。屋上駐車場ではなくて、舗装されていない鉄板の屋根ですから、不時着させてテルミット燃焼を起こせば、何処でも直ぐに穴が開きます。」

「光る揺らぎはどうするのよ？」

ハンドルを片手で操りながら、笑子が訊きます。

「空中でドローンが損傷を受けたとしても、屋根の上に落とせば充分だ、穴の開いた屋根から、天井内に火災が拡がる。」

「もし！最初から全て心得てのシナリオだとすれば！あの三浦っていう官僚、絶対に許せないわね！」

思いがけない玲子の激しい怒りに、大いに心震わす3人でした。

———おわり。

全てフィクションであり、実在する個人・団体とは何ら関係がありません。悪しからずご了承下さい。

尚、添付した写真は、【PhotoAC】及び【Photock】から転載させて頂きました。

丹波山、霧氷に寄せ合う肌も凍てつき 。

<http://p.booklog.jp/book/118323>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118323>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト